発達障害児の保育における研修プログラムの開発 (3)

—保育士効力感及び保育士ストレスの変化に着目して—

○竹澤大史¹・塩田心²

(¹愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所・²あいち発達障害者支援センター)

キーワード：発達障害・保育士・研修

Development of in-service training programs for nursery teachers of young children with developmental disabilities

Taishi TAKEZAWA¹, Kokoro SHIOTA²

(¹Institute for Developmental Research, Aichi Human Service Center, ²Aichi Support Center for Persons with Developmental Disorders)

Key Words: developmental disabilities, nursery teachers, in-service training

目 的

保育園による発達障害のある子どもの受け入れが進む中、障害の知識や支援スキルをもつ保育士の養成を目指した研修プログラムの充実が求められている。しかし、発達障害に関する研修プログラムの形式や内容について検討し、またその効果を検証した研究はまだ少ない¹⁾。発達障害の支援方法としては、行動の随伴性に着目した応用行動分析や、認知特性に着目した視覚支援や構造化などが挙げられる。A 県では、従来の巡回相談のシステムベースにした保育士研修事業を行っている^{2),3)}。

本研究では、発達障害のある子どもを担当する保育士を対象とした研修プログラムを試行し、その効果を検証するとともに、保育士の発達障害についての知識や支援案の内容がどのように変化するか明らかにしたい。

方 法

【参加者】A 県内 3 市町の保育士 延べ 231 名(M:F=11:220, Age:35.1±11.09)。

【期間】平成 24 年 5 月～平成 25 年 3 月。

【研修プログラム】各市町にモデル園 (1 園) を設定し、各モデル園において研修プログラムを実施した。プログラムの内容は、1. 発達障害のある子どもの支援についての講義を 1 回。2. ワークショップ形式の研修会 2 回。3. 行動観察を伴う事例検討会 3 回。

【測定】1. プログラムの実施前後に、保育士効力感尺度及び保育士ストレス尺度を実施した。2. プログラムの実施前後に、広汎性発達障害について、「イメージ」すること、「観察のポイント」、「支援方法の案」について、それぞれ自由記述で回答してもらった。

【分析】1. モデル園に所属する保育士と、その他の保育士のグループに分け、プログラム実施前後の各尺度の得点変化を調べた。2. モデル園の担任保育士 (中心参加)、ワークショップ及び事例検討会に参加した保育士 (周辺参加)、その他の保育士 (その他) のグループに分け、各項目の回答からキーワードを抽出しカテゴリー分析を行った。またプログラム実施前後の変化も調べた。

結 果

1. プログラムの終了時、プログラムに参加した保育士の効力感得点が有意に上昇した ($p < .05$)。また、モデル園に所属する保育士の得点は、その他の保育士の得点より優位に高かった ($p < .01$)。保育士ストレス尺度得点は、2 群ともに有意な変化はみられなかった。
2. 広汎性発達障害のイメージとしては、プログラム実施前 (178 名, M:F=8:170, Age:35.7±11.34) では「自閉症」「高機能」といった障害のラベルに関する知識や「こだわり」など行動の特徴のほか、「分からない」を含む無回答が目立っ

た。終了時 (53 名, M:F=3:50, Age:34.8±10.1) には、中心参加・周辺参加群ともに「社会性」「コミュニケーション」「対人関係」「苦手」などが近くにプロットされ、広汎性発達障害のイメージが「社会性の困難」という方向にシフトする傾向がみられた。

観察のポイントについて、実施前では「得意」「場面」「特徴」「性格」が特徴的にみられたが、終了時には「こだわり」「困っている」「興味」「理解」「できる」などのほか、無回答の多さが目立った。このため他の 2 項目の無回答と合わせて分析 (Fisher の正確検定) したところ、観察のポイントにおいて、実施前では周辺参加とその他の群で有意差がみられた (ともに $p < .05$)。終了時では、周辺参加群においてのみ有意差がみられた ($p < .05$)。

支援方法の案については、実施前で「個別」「視覚的な手がかり」など特徴的な方法についての記述が多くみられたが、無回答も多かった。終了時では、「行動」「具体的」「知らせる」「環境」などが多くみられた。中心参加群では、実施前に特徴的だった「認める」が、終了時には「作る」といった能動的な表現に変化した。

考 察

研修プログラムに参加した保育士の効力感が向上し、ストレスが増大しなかったことから、プログラムに一定の効果があったと考えられる。保育士がもっている障害のイメージについては、単なるラベルから障害の本質への変化がみられた。また支援方法の案については、「個別支援や視覚支援を行いながらも、ありのままの子どもの姿を認める」という立場から、「子どもの具体的な行動に注目し、適切な環境を整える」という、より積極的な姿勢への変化がみられた。一方、観察のポイントについては無回答が多く、他の項目と比べてもイメージが持ちにくいことが分かった。この傾向は、終了時にも一部みられたことから、研修の効果が及びにくかったことがうかがえる。今後は、保育士ストレスの軽減や保育士スキルの改善などを旨としたプログラムの開発に取り組む予定である。

引用文献

- 1) 高木明日香・井上雅彦・筱更治 (2007). 発達への気になる子どもの問題行動に対する教師研修の効果(1). 日本行動療法学会大会発表論文集, 33, p500-501.
- 2) 山崎志野・竹澤大史 (2011). 発達障害児の保育における研修プログラムの開発 (1). 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, p354.
- 3) 竹澤大史, 塩田心, 玉井一男 (2012). 発達障害児の保育における研修プログラムの開発 (2). 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, p377.